

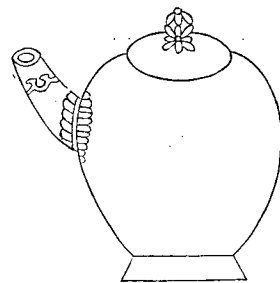
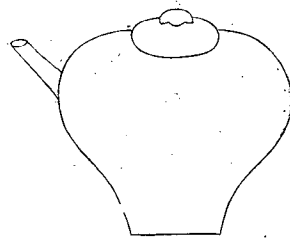
又受一斗ともあれば、やい大なるさて御名に負坐るは其由あるべし、器と見ゆ、此物名抄には見えず、

〔多志良加考〕延喜式神今食云、多志良加四口、

タシラカは御手水を入れる器なり、今のハンサウは此遺製にて、名をかへたる物也、

村井古巖所傳多志良加の圖

はんさうの圖



ハンサウは字音なり、和名類聚鈔澡浴具、説文云、匱、和名波邇、一音移、柄中有道、可以注水之器也、俗

棟字、所出未詳、但和名之義、或説云、有柄半插其内、故呼爲半插也、

弘賢按ずるに、延喜式食神今に匱をハサウとよみしハ、和名抄以後につけしなるべし、匱と多志

良加とならべ載たれば、をのづから別物なりし事あきらけし、匱は丈ひきく長き物にて、タシ

ラカとおなじからざれども、匱字の注釋、タシラカニ似たる所あるより、ハンサウとよびな

らはせしなるべし、略中

タシラカの義詳ならずあるべし、歟、カとはミカ、ヒラカなどは手の義、シラはまらけの義にて、淨むる意にても

しべ

文化十二年正月

源弘賢

〔匡房卿大嘗會記〕天仁元年十一月廿一日、亥一刻供神膳、其次第自柏殿東、其行列次第、略中次主水